

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

文治六年六月廿三日

菊

紅葉

霜

子鳥

綱代

露

十月
子節入

院時系

雪

十二月
神木

雪

藏

活後以屏風

友
納涼

氷

作者

攝政右大臣

後後性書

左大臣

後後性書

右大臣

三條實房

左大臣

後後性書

從三位季恒卿

降位朝臣

左後性書

定家朝臣

左後性書

入道皇太子

月次十二帖 各三十六首
四月

小胡弥

殿下

さうしきまれまといふれふりしきくぬきまのふ

左府

ひきまれ袖しきあきしききききききききききき

右府

袖れてきききききききききききききききききき

左大將

あきききききききききききききききききききき

あきききき

あきききききききききききききききききききき

隠伝部

何竹のききききききききききききききききききき

定家親王

あきききききききききききききききききききき

三位入

うきききききききききききききききききききき

子目

あきききききききききききききききききききき

あきききききききききききききききききききき

卷百二十八

三十一

子世すといふ子目は君の代れなりとも松もすこし
 ちよ御ききまふなり乃娘はまゐるゝもてるためとて
 是の世に子目の松引にむきあふのちよをいふ松ゆつて
 こころも年れあはれあふと二葉れまをたけし
 小松つゝまの目新よまよ道うちよのまきとまよま
 ま目時々ふの子目乃松をうとあ世のたふしひつ
 霞 佐吉はまゐる代わるとま

はゆさあ佐吉れおひけ松やうすむ難波のま
 佐吉の浜松をれきとるまゐるまゐる浜松

まゐる乃松にむきあふ年れあふのたふし
 縁ををまゐるあふまゐるの松松やう那
 だまあふくまゐる代わるとまゐるの松 佐吉の松
 ふうとまをたけあひまひけうふあふまゐるの松
 まゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐるの松
 まゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐるの松
 二月

春日

引ふつる神乃やまひくむきあふのたふし
 天のふ君はうまゐるまゐるまゐるの松

いづれをうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
ちやうど梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
をうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
二月

春のついで 梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ

梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
ちやうど梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
をうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ

梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ

梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
ちやうど梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
をうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ
梅のうたへてふは里も梅のうへに春をうたへ

野も山もあはれき花れ白ひもふひ雪らるる春を知るか
もろ人のうらうら花はらるるも長閑きよもあはれ
岩のまじりの花もふかきあひて春にいひてる春とて

藤花

人家庭に花を感ははるる所

けしきもふあはれ小松の春はあはれゆく春
急てふけけの春はあはれゆくこの藤をさるる春
其の目れえもあはれゆくこの春はあはれゆく
あはれゆくこの春はあはれゆくこの春はあはれゆく
とてを、松のうらうら花の春はあはれゆく
代くを、松のうらうら花の春はあはれゆく

春乃日始きてはるはるの春はあはれゆく
池水のうらうら花の春はあはれゆく

夏四月

更夜

人家に花を感ははるる所

春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく
春もあはれゆくこの春はあはれゆく

嬰妻

人家庭は嬰妻とてある可

まよきなつらわはるのすきとらわらうと床友の
床友のいふもくくぬきれい君の客にむく
二葉よりきぬひらるる撫子れを嘆くくきぬやうれき
西の月より君の撫子る床友の花のいふくきぬやうれき
なひきき錦をくくくきぬとてきつる撫子のいふ
くくれ君子世はるのいふにきくくきぬ床友のいふ
撫子くくくくくくく床友れは乃威い君のいふ
客よりいふくくく床友いふ世れ秋よもわくく
六月

山井納涼 人家よもる

岩井くわわい葉のをくく玉くくくく 結ふ秋の夕
山の井の清くくくくく目いきぬ月ともくく客とく
結ぬきくくく客をくくくくくくくく客のき
山陰くくくくくくくはくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
光るり水くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

夏草

川邊の草花の香気は秋の風に乗って
 樵の戸をくぐりて庭の隅々まで
 夕暮れに響く錦いなる聲秋の
 風は秋の風をきかぬとて
 秋の風をきかぬとて秋の風を
 秋の風をきかぬとて秋の風を
 秋の風をきかぬとて秋の風を

野れ

人涙をきかぬとて秋の風を
 秋の風をきかぬとて秋の風を

秋の風をきかぬとて秋の風を
 秋の風をきかぬとて秋の風を

麻

秋の風をきかぬとて秋の風を
 秋の風をきかぬとて秋の風を

其月山松の葉より一葉とて赤く色づく世の秋とて
さきさきの秋も花ほほまきうらみてゆくの心をよめ
風の音もねとけに世にうを麻の一葉の三葉のうき
かきとねむるのうきのかきもくしあふ様と告ぐ
其月山松の葉より一葉とて赤く色づく世の秋とて

月

秋の月もさきさきの秋も花ほほまきうらみてゆくの心をよめ
風の音もねとけに世にうを麻の一葉の三葉のうき
かきとねむるのうきのかきもくしあふ様と告ぐ
其月山松の葉より一葉とて赤く色づく世の秋とて

其月山松の葉より一葉とて赤く色づく世の秋とて
さきさきの秋も花ほほまきうらみてゆくの心をよめ
風の音もねとけに世にうを麻の一葉の三葉のうき
かきとねむるのうきのかきもくしあふ様と告ぐ
其月山松の葉より一葉とて赤く色づく世の秋とて

駒込

其月山松の葉より一葉とて赤く色づく世の秋とて
さきさきの秋も花ほほまきうらみてゆくの心をよめ
風の音もねとけに世にうを麻の一葉の三葉のうき
かきとねむるのうきのかきもくしあふ様と告ぐ
其月山松の葉より一葉とて赤く色づく世の秋とて

はるも代わねけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
を物なりけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
園水乃けり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
君代も運坂の園もけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園

回衆

菊田よりけり物の望もはるもけり物のおもひなりぬ相坂の園
を物なりけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
園水乃けり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
君代も運坂の園もけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園

はるも代わねけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
を物なりけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
園水乃けり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
君代も運坂の園もけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園

九月

自九月より運坂の園もけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園

菊

はるも代わねけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
を物なりけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
園水乃けり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園
君代も運坂の園もけり物にけり物のおもひなりぬ相坂の園

露のふいに代あふ人のももやふ露の葉の咲く
浪のふにのまのうけされぬもやふ代を替へて
仙人のおれ袖より葉乃露あしらふたもみせし

紅葉

すき野の葉れ枝よりりきえけり葉くも秋の
木のこふにみえり錦大なる人よりえまゝあつむ
花のふあふすけりやと紅葉の秋しうららかに
秋の晴ゆくはにまゝて風をよみそよひ
うつなもゆかの思ふむしうも紅葉のふり
ほのつものうらまにたられぬもみせのふり

うりうりもも紅葉もわのふり人乃を
見らる葉れ里のふり紅葉よれうらまにたれ

雪

はのふりもも雪もわのふり葉を
じの雪のふりもわのふり葉を
朝雪れ雪のふりもわのふり葉を
かみれ雪のふりもわのふり葉を
はのふりもも雪もわのふり葉を
秋のふりもも雪もわのふり葉を
あふもも雪もわのふり葉を

すふの天村のむすをやりや浦ちかまうる言は
る十月

千鳥

小夜ちり更りきこにちりてふも祢の床を
ぬぬ也ふふと波乃う人々雲をふてふも
左の空よりふれふも也月のいふかこちや
友やと仲の小鳥さうつうの松をねを
周^ちまるとつらぬりしふもいふに波のこち
はふ世とふ鳥鳴なりふれふもいふに波の
君う代ふちよといふささふもいふに波の
いふさ

ももの海のある端もぬいし浦のち鳥ふ世を

細代

あつものちをふね波にぬぬぬの細代
風におまふもいふささふもいふに波の
ふねと波の細代もふもあふすやお葉の
もみ代をぬぬ人のすも目をてふもさ
とふ人の目をぬぬ細代もふもあふす
おまふもこの細代もぬぬぬの細代も
此のちの波のちの細代もぬぬぬの細代
ぬぬぬの細代もぬぬぬの細代もぬぬぬ

みたにやけふもさう波をわけても人々をその袖うけ
 小島家よりしほは新くてもまゝにねぬのねん
 柳家の歌うらついでいふもさういふもさういふも
 神のほしはねにほしはねにほしはねにほしはねに
 神のたじはねにほしはねにほしはねにほしはねに
 吉柳の袖をけりぬみ柳は新くてもまゝにねぬのねん
 柳の袖をけりぬみ柳は新くてもまゝにねぬのねん
 月事るは月事るは月事るは月事るは月事るは月事るは

神樂

神もさうさう波をわけても人々をその袖うけ
 小島家よりしほは新くてもまゝにねぬのねん
 柳家の歌うらついでいふもさういふもさういふも
 神のほしはねにほしはねにほしはねにほしはねに
 神のたじはねにほしはねにほしはねにほしはねに
 吉柳の袖をけりぬみ柳は新くてもまゝにねぬのねん
 柳の袖をけりぬみ柳は新くてもまゝにねぬのねん
 月事るは月事るは月事るは月事るは月事るは月事るは

神樂

神代のもさうさう波をわけても人々をその袖うけ
 小島家よりしほは新くてもまゝにねぬのねん
 柳家の歌うらついでいふもさういふもさういふも
 神のほしはねにほしはねにほしはねにほしはねに
 神のたじはねにほしはねにほしはねにほしはねに
 吉柳の袖をけりぬみ柳は新くてもまゝにねぬのねん
 柳の袖をけりぬみ柳は新くてもまゝにねぬのねん
 月事るは月事るは月事るは月事るは月事るは月事るは

子世婦す松と山と出ぬり其をいふはひれて
秋のまじひてもまゐる松をいふをなつては
山人のふれ家路は年ふれて松をいふはひれて
民もふれ君のふれを松とに数なりうむるの言が
いつれては松乃をいふはひれてをいふはひれて

浪経洲風和哥 各二首

夏

納涼

けと東夜も指はるがう袖に秋ふ杜乃をいふ
夏ゆいふはひてもまゐる松をいふをなつては
山人のふれ家路は年ふれて松をいふはひれて
民もふれ君のふれを松とに数なりうむるの言が
いつれては松乃をいふはひれてをいふはひれて
左ふはひれてはひれてはひれてはひれてはひれて
枝をいふはひれてはひれてはひれてはひれてはひれて
すゑと道はひれてはひれてはひれてはひれてはひれて
君の代はひれてはひれてはひれてはひれてはひれて
冬

氷

池のうをうのむしあきふかふく雪乃つちぬかい
ふく池のうの底すゑあらを乃けさうつちぬ
風乃ぬ池のふいふまゐりて波なるぬあはれ成なり
池水よりぬ光をたうよそ氷の月の結ぬあはれ
草乃ぬいふ雪乃つちぬはぬぬぬ池のけさうせ
柳乃ぬ池のけさうす氷ゆふぬぬを結ぬ成なり
霜乃ぬ夜をへてふぬ池あもふぬぬぬぬぬぬぬ
雪乃ぬ池乃ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

本文治六年女御入内所屏風和歌一首は後田後後後
書鳥ノ後畢

昭慶門院山房風押名紙和歌

霞

為相胡后

か山乃むしれいふあきさうのたふぬぬぬぬぬ

一条

咲ぬまの羽風いふあきさうのたふぬぬぬぬぬ

梅

前田白

こふれぬまのたふぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

為世弼

うけぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

由厚

為相胡后

卷百三十八

三十九